

素朴で直情的であるゆえに、ズッコケ具合(マルコ 8:33)や挫折の幅(ルカ 22:61~62)が甚だしかったペトロ。そんなペトロが聖霊から「炎の舌」を与えられ(使徒 2:3)、キリストのことを堂々と語り出した(2:14~)。

「兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあり(2:29)」。それと対比するかのよう「神はこのイエスを復活させられた。わたしたちは皆、そのことの証人なのだ(2:32)」と語った。

聖霊は、立ち直ったペトロをして、何を伝えようとしているのか。

人間の宿命がそうであるように、民族の星ダビデも死んだ。このように世の現実は否応なく「命から死へ」向かう。ところがキリストに関しては逆の方向。

「彼は陰府に捨て置かれず、その体は朽ち果てることがない(2:31)」。神はこのイエスを復活させられた(2:32)。つまり「死から命へ」の方向だ。

ペトロら使徒はキリストを通して、「死から命へ」向かう神の創造を証している(2:32)。

キリストの証人となった使徒とは、どんな人間だったか。イエスに希望を見だし出家までしたが、十字架では霧散し(マルコ 14:50)、復活したイエスに遭っても「命から死へ」の方向だった(ルカ 24:37~38)。

ところが聖霊の風は、信ずる事ができなかった弟子に吹いた。「信ずる事ができない」ことは決定的な欠けではない。私たちが不信でも、聖霊の方から乗り越えて来てくださるゆえ、嘆かなくともよい。

「イエスは神の右に上げられ、約束された霊を御父から受けて注いでくださった(2:33)」。何やらまどろっこしい。神の「右」におられるイエスが、御父からの聖霊を「受けて注いで」下さる。

読み解くなら、イエスは人間として生き、人間として死に(マルコ 15:34)、人間の弱さが分かる(14:35)。「信ずる事ができない」者の弱さを知り尽くしておられるゆえに、頼りない私たちに霊を注いで下さる。私たちの信仰が乏しかろうとも、イエスの圧倒的な愛がそれを乗り越えてこちら側へやって来る。

イエスが上げられた「神の右(使徒 2:33)」とは何か。「主の右の手は高く上がり、主の右の手は御力を示す(詩編 118:16)」。すなわち「右に上げられた」イエスは、神の力そのもの。だから私たちの命を、死から創造しうる。

「だれがわたしたちを罪に定めることができるか~復活させられたキリスト・イエスが神の右に座っていて~執り成して下さる。だれがキリストの愛からわたしたちを引き離すことができるか(マテ 8:34~35)」。神の力であるキリストが、愛の聖霊で、私たちが死から命へと創造する。

恐れに囚われても、キリストは愛の力である聖霊を、私たちの弱い所に注いで下さる(使徒 2:33)。「あなたがたは、今このことを見聞きしている(2:33)」。

だから「今」、その真実を真っ直ぐに見、柔らかに聞こうではないか。そしてこの私もまた、キリストの証人であると自覚しようではないか(2:32)。

キリストの証人は、「神はこのイエスを復活させられた(2:32)」方向で生き、その方向で死に、その方向で復活する。キリストの証人には、進み行く方向がある。

「命から死へ」の世にあって「死から命へ」の日々を過ごす。世の秩序を揺さぶる愛の聖霊。「信ずる事ができない」日々は乗り越えさせられ、静かな焔を燃やし(2:3)、聖霊に満たされた瞬間を生きる。

キリストの瞬間には永遠が凝縮されている。



《おまけのひとこと》

聖霊を向かい風に進むのは そりゃ辛かろう 追い風に押されれば すいすい進んでどこやらへ
どこでも辿り着く所でよい 追い風の未知は楽しいが 懐かしさは 向かい風に歯食いしばる歩み